

教化センターだより

No. 404

発行日 2021年2月1日
発行 真宗大谷派大阪教区
教化センター
TEL 06-6251-0745
FAX 06-4708-3278

◆ 御堂文庫 蔵書の紹介 ◆



〈発行〉中公文庫

『虹色のトロツキー』（全8巻）

〔著者〕安彦良和

日本人以外の他民族を認めようとしなない今日の日本人の病は何も今に始まったことではない。だから、安彦氏の『虹色のトロツキー』は、満州（現中国東北部）という地であつて日本人と多民族の関係を描くことで、歴史的な、また今日的な日本のあり方を考えさせる好個の漫画なのである。
〔『第3巻』あとがきより引用〕



〈発行〉双葉社

『この世界の片隅に』（上・中・下）

〔著者〕こうの史代

呉市は今も昔も、勇ましさとたおやかさを併せ持つ不思議な都市です。わたしにとっては、母の故郷です。わたしに繋がる人々が呉で何を願い、失い、敗戦を迎え、その二三年後にわたしと出会ったのかは、その幾人かが亡くなってしまった今となっては確かめようもありません。だからこの作品は解釈の一つにすぎません。ただ出会えたかれらの朗らかで穏やかな「生」の「記憶」を抛り所に、描き続けました。
〔『下巻』あとがきより引用〕



〈発行〉汐文社

『はだしのゲン』（全10巻）

〔著者〕中沢 啓治

「はだしのゲン」は、どんな境遇にもくじけることのない、ゲンという少年を主人公にしているだけに、戦中・戦後の悲惨さがより痛切なものとして感じられる。戦争体験、とくに被爆体験の苦しさを戦争を知らない世代に語りかけるのは大変むずかしい問題だ。しかし、むずかしいからといってあきらめるわけにはゆかない。「はだしのゲン」はその意味でひとつの役割をはたしている。
〔『第1巻』あとがきより引用〕

— 教化リーフレットの

「活用」について —

4枚の「教化リーフレット」

は、各寺院・教会において「寺報」

や個別に複写しての配布、同朋

会や團法会での教材として活

用いただければ幸いです。

— 3月のリーフレット —

リーフレット①

「掲示板のごよは」……小松 肇

「いずれの行にても、

生死をはなること

あるべからざる」

リーフレット②

「今月のいっば」……山雄達磨

『万善自力殿勤修

円満徳号勸専称』

リーフレット③

「もしもし相談」……稲垣直来

『育児への不安で

子どもの誕生を喜べない』

リーフレット④

「仏典マンガ・仏さまのおしえ」

『ライオンとイノシシ』

（敬称略）

いずれの

ぎよう
行にても、

しやうじ
生死を

はなるること

あるべからざる

『歎異抄』
たんしやう

第三章より

上記の標語は、どのよ
うな修行でも、生死から
離れられない我が身の事
実を語っています。

ここでの「生死」と
は、単に生き死にのこと
ではなく、迷いの世界、
流転のすがたを表す言葉
です。仏道を歩む目的は
正にこの迷いの世界、流
転のすがたを越えること
です。しかし私たちは迷
いの世界を越えるところ
か、迷っていることに気
付けません。どうして私
たちは迷っていることに
すら気付けないのでしょ
うか。

最後の糸を出し終えた蚕
は外部から完全に遮断さ
れ孤立してしまいます。

私たちも蚕と同じで
す。私一人が正しいとい
う思いや自身への執着心
がいつの間にか私をがん
じがらめに縛り上げ、自
分の思いにこり固まった
状態で世間を分別しま
す。そんな姿に気付かな
い、あるいは領けない私
たちは苦悩の原因を私の
外に求め、さらに迷いを
深めて苦しむのです。

蚕のように自らを縛り
上げ孤独にさせている原
因が私自身の中にあつた
のだと目覚めさせるはた
らきこそが念仏です。本
願の仏道によってこそ生
死を越える道が私たちに
開かれるのではないで
しょうか。

(小松 肇)

万善自力 貶勤
円満徳号 勸専称

万善の自力、勤修を貶す。
円満の徳号、専称を勧む。

たい。生き甲斐を見つけない！」と願わずには、いられないのではないでしようか。少々乱暴ですが、これを「自力の菩提心」と呼びます。

ここには「貶（けなす）」という大胆な表現があります。貶されているのは「自力の菩提心」つまり仏道を歩む志願、あるいは善いことを成した

私たちは気がついたらこの世に生を受け、ふとした縁で「自分の生命には限りがある」と痛感します。それは、大切な方との死別かもしれないし、コロナ禍の影響かもしれないし、この時「人生を悔いなく生き

心の奥底から出てくる大切な欲求と言うこともできます。しかし、自分で頑張ろうとするこの思いには「大きな落とし穴がありますよ」と道綽禅師が警告されるのです。

道綽禅師は、動乱の時代を過ごされました。生まれ代も一瞬、国によって奪われたのです。

ふとZエスの連続テレビ小説「エール」の一場面を思い出します。

戦争中、主人公である

作曲家は「世のため人たために」と、真面目に一所懸命に、生き甲斐を持って、国威発揚の歌を作ります。

しかし、敗戦となり、自分が送り出した少年が帰らぬ人となった時、主人公は自分がしてきた善いことの正体を思い知らされます。

何より、若者が自分の歌で出兵を決意する姿に感動していた自身のあさましさを思い知るので

どうでしょう、正義を掲げない戦争はあるでしようか。いえ、日々の生活も変わりません。皆、

それぞれ立場で、いわばやり甲斐を持って、善いことをしているのではないでしようか。

自分で善悪の物差しを作ること自力といいますが、この落とし穴のなんと危険なことか。

これに気がつかせてくださるのが、円満の功徳を持つお念仏なのです。

阿弥陀如来は「本当にそれで大丈夫なのか。自己中心の、自己満足に陥ってはいないか」とたえず私の闇に問いかけてくださるのです。

この阿弥陀如来のおはたらきに南無と頭を下げ、お念仏を称える意外に私の生きる道はないと、道綽禅師は教えてくださるのです。

(山雄 達磨)

今月のことば出典 『正信偈』

『真宗聖典』

206頁

『真宗大谷派 勤行集』(赤本)

もしもし相談



育児への不安で
子どもの誕生を
喜べない

問

この春、念願だった子どもが生まれました。幸せを感じる反面、夫婦共働きということもあり、育児に不安があります。

育児疲れが原因の虐待などがニュースでよく取り上げられています。自分もそうなってしまうらどうしようかと悩んでいます。

(31歳・女性)

答

仏教では誕生児を仏子^{ぶつし}と言い、仏が誕生したとお祝いします。仏である理由が三つあります。

一つは無邪気^{むじや}であることです。損得勘定^{そんとくかんじょう}しないと

いう事です。次は利他^{りた}であること。他者を笑顔にさせるという事です。そして私が笑顔にさせたという自負心^{じぶしん}が無いことです。

その事を思つて赤ちゃんに向き合つてみますと、良い親であろうがなからうが、損だ得だと言いません。またどんな人であってもすべてを受け入れる真っ白なその存在は、他者^たを無条件で笑顔にします。そこには私が笑顔にしてあげたという気負いは微塵^{みじん}もありません。よくよく真向かうと不思議な存在です。仏としか言いようがありません。そして仏子^{ぶつし}に照らされて思うことは、私達は悲しいかな損得でしか物事

を見れない邪気^{じや}だらけで、自利^{じり}(自分の利益しか考えられない)しかなく、自負心^{じぶしん}によって一喜一憂^{いちきいちゆう}し喧嘩^{けんか}し合っているのが現実ではないでしょうか。

そのような者が突然仏子の親として歩みを始めるとするのは大変な事です。悩まない方が不思議です。ですからどれだけ理想の子育てを模索してみても、自利の私達の思いはことごとく打ち砕かれることでしょう。

ご質問には、共働きによる育児や虐待が不安とあります。どのような環境であっても不安のない人はいません。ある方が「子育ては己育て^{こそだ}」だと言われまし。仏でない私達に出来ることはたかが

知れています。だからこそ同じように不安の中を助け合つて歩んでこられた先輩方の力や言葉をお借りして、少し休みながら自己と見つめ合う時間を持つて下さいと言われました。一生懸命になりました。一生懸命になりすぎて、自分の声も、赤ちゃんの声も聞こえなくなつてしまつては元も子もありません。

苦しくて辛くて孤独な時もあるかと思いますが、必ず生まれてきてくれて有難う、親に成らせてくれて有難うと心から思える日が来るので、たくさんの方に助けてもらいながら仏子と共に歩んで下さい。

(稲垣 直来)

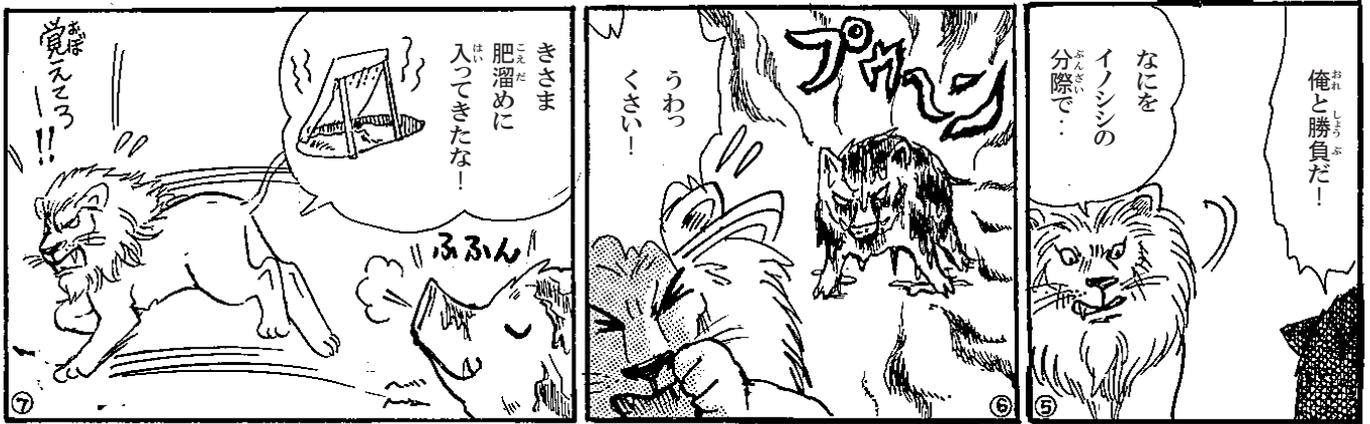
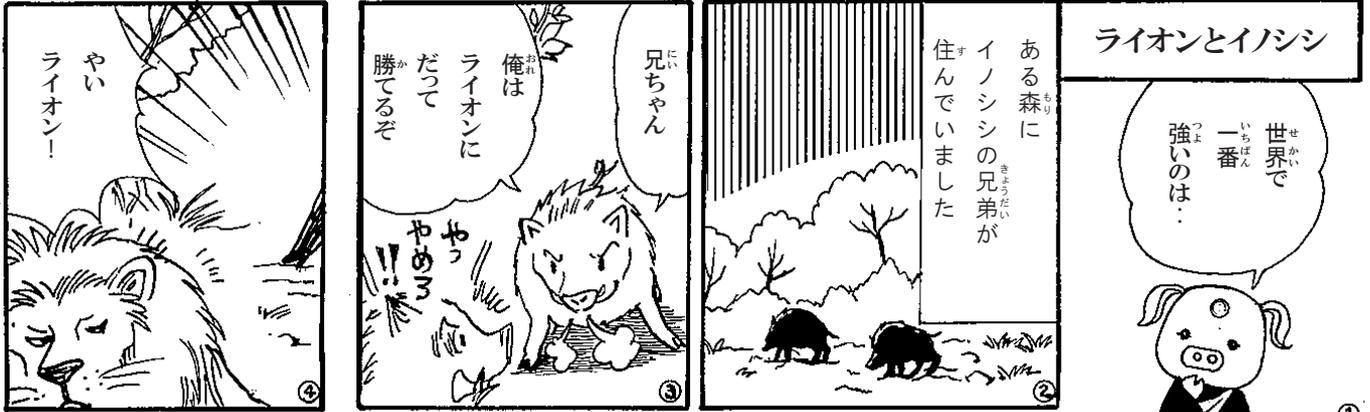


仏典マンガ・仏さまのおしえ



絵：小川ゆきえ (188)

ライオンとイノシシ



参考・『ジャータカ物語』

『ジャータカ』は、仏陀の過去生の物語集。パーリ語聖典では、22編547話からなっています。多くの經典の中に引用されて、經典の広がりとともに、世界各地に伝えられました。(ジャータカ 153)